

2016年の初めに

16.01.10 守山裕次郎

昨年は敗戦後 70 年の節目の年であった。繁栄する東京の超高層ビル群を目の当たりにして、かつてそこが焼け野原だったことを現代の人々は果たして想像できるのだろうか。

あれから半世紀をはるかに超える年月が経った現在、隣の国は「虚構の慰安婦問題」にこだわり続け、いわゆる慰安婦像を自国内だけでなく米国内にまで設置し、更に増設する計画だそうである。そもそも 50 年前の日韓基本条約ですべて解決済みの外交的問題を、条約締結後数十年も経ってから蒸し返し、再び相手国家に賠償を求めるという常識外れのこの異常な国民性を、一体どのように我々日本人は理解すればよいのであろうか？

この国の検察は、一昨年 of セウォル号沈没事故当日の大統領の動静につき、朝鮮日報の記事を引用する形で紹介した産経新聞の前支局長を告訴するとの信じがたい行動に出た。民主主義国家とは思えないその行為に世界中から非難ごうごう、さすがにこれではまずいと判断したのか、年末の裁判では大統領側の恣意的な意向も働いて無罪が確定したが、その異常さが世界中に露呈したという意味で、日本には貴重な収穫だったとも言える。対馬の寺から盗まれ発見された仏像 2 体のうち、1 体はいまだに返却されておらず、その司法判断として「それでよし」とするこの国の非常識さにはあきれざるばかりである。

一方、もう一つの隣国中国は、尖閣諸島付近の領海への侵犯を日常的に行うだけでなく、南シナ海のサンゴ礁までを埋め立て、着々とここを軍事拠点化する行動を継続させており、まるで 1 世紀以上遅れた帝国主義国そのものの振る舞いである。加えてこの国は、日本による南京大虐殺 30 万人との「あり得ない虚構」をでっち上げ、その宣伝を世界に向けて行っており、韓国同様その反日活動は収まるどころか、逆に益々激しくなっている。

この両国は 70 年以上も昔の出来事、しかも歴史的に全く虚偽とされる問題を蒸し返し、これから先日本との関係をどうするつもりであろうか。振り返って、事ここに至るまでの我が国の大反省点は、「事実を曖昧にしたままで」中途半端な妥協を重ねたことであろう。かつての村山談話、河野談話などはその典型例であり、今後は日本人のメンタリティーが全く通じない相手であることを十二分に認識し、全世界に向け真実はどこにあるかを強く訴え、広く国際社会の理解と賛同を得る努力が何より重要である。

ところで、昨年の安保関連法案採決の際の国会でのドタバタ劇は実にお粗末であった。民主党を中心とした野党議員は実力で法案成立の阻止を図るべく、参院特別委員会の鴻池委員長を「女性の壁」を作って委員長室に缶詰めにし（少しでも触れたらセクハラを叫ぶ）、あるいは委員長目がけて頭から突っ込み（通称ダイブ小西：民主党）、日頃平和を叫ぶ党の議員とは思えない乱暴行為を働き、わが国の国会議員のレベルの低さを全世界に発信した罪は極めて重い。かりにも「良識の府」と呼ばれる参議院の議員でありながら・・・

それにしても今回改めて実感したのは、いわゆる憲法学者と呼ばれる人たちのお粗末さ、お気楽さであった。法案が憲法に合致しているか否かは、裁判官に判断してもらえば良い

話しであり、戦後 70 年も経って世界情勢が一変した現在、終戦当時米国の意向を受けて 10 日前後でにわかで作った現憲法につき、その成立過程も含めての問題点を洗い出し、国民的議論を活発化させることこそが彼ら憲法学者の本来の役割ではなかろうか。

この安保関連法案のニュース、あるいは沖縄の基地移設問題、更には中国、韓国両国が絡む諸問題において、日本の多くのマスコミ報道が相変わらず著しく偏っていると感じるのは、果たして自分だけなのだろうか？特に朝日新聞に代表されるマスコミ報道は、事実・真実が何なのかは別として、まず自社の主張があり、それに合致する部分だけ切り取って報道し、逆に都合の悪い事実は「報道しない自由」により一切伝えない。特に中国や韓国との関連では、彼らの非常識な行動を厳しく指摘することなく、まるでオブラートにでも包む表現を用いながら、その代弁者（まるで日本支局）の如き論調が余りにも多い。

一昨年、朝日新聞による長年（30 年以上）の「慰安婦強制連行」報道が、全くの誤報であったことをようやく認めたが、この誤った報道により日本の国益がどれほど失われたかは計り知れない。しかしながら、この新聞社には全く反省が見られない。この慰安婦問題のみならず、南京大虐殺、あるいは靖国神社参拝問題等においても、70 年代～80 年代にかけて中国や韓国が何ら外交問題にもしていない中で、わざわざ朝日新聞が問題を提起し（ご進講して）今日の事態に至った訳で、日本の国益損失からは「A 級戦犯」に値する。この傾向は他の多くのマスコミ（含 NHK）も同様で、日本人の誇りを失わせる自虐史観に凝り固まっているが、彼らは一体何ゆえの目的で我が国を自ら貶めるのであろうか？

次に、これら国内あるいは近隣諸国との問題から海外に目を転じてみると、昨年はパリ繁華街でのテロ事件も含め、まさに「世界大動乱」の初年度を感じさせる年でもあった。中東情勢は益々混乱を極めており、シリアでは自称イスラム国（IS）を含めた三つ巴の戦いが続き、これにロシアや欧米がそれぞれの立場で参戦して、混迷を一層深めている。その結果多くの難民が欧州に押し寄せ、途中の地中海を命がけで渡る「ボートピープル」の遭難が多発する悲劇も生まれている。

この問題の発端は米国の対イラク戦争にあり、フセインとの戦いには勝利したものの、それまで辛うじて保たれていたこの地域のバランスが一举に崩れ、イスラム教とキリスト教との争いに加え、イスラム教シーア派とスンニ派による内部抗争が急速に激化した。先日はサウジアラビアとイランが国交断絶する事態に至ったが、この混乱収拾の困難さは半端でなく、原油供給をこの地域に頼る我が国にとっても極めて重大事態である。

それにしても米国も罪作りな国である。イラクが当時大量破壊兵器を保有しているとのニセ情報に踊らされ、ブッシュ大統領が始めた戦争ではあったが、これがパンドラの箱を開ける結果となってしまった。民主主義の概念に乏しいイラクやアフガニスタンでの戦後処理は難しく、かつてのベトナム戦争と同様、泥沼の戦いからほうほうの体で撤退を試み、米国の厭戦気分の中で新たに登場したのがオバマ大統領であった。だが今度は「墓に懲りて膾を吹く」の例えのように、彼はあらゆる場面でその軍事力行使に腰が引けてしまい、その弱腰を見透かされての結果がシリアでの大混乱であり、クリミア半島はロシアに占拠

され、中国による南シナ海埋め立ての加速化にも結び付いている。

先日は北朝鮮による核実験が強行され、中東情勢は益々混迷化し、南シナ海での中国の覇権拡大（先日、埋め立て滑走路を使用して試験飛行）、尖閣諸島付近の我が国領海への日常的な侵犯、大都会も例外でないテロ事件発生の恐怖等々、きな臭さの危険性が世界中で急速に高まっているのが現状である。加えて、中国経済の急速な悪化、中東情勢混迷の中での意外な原油安が絡まり、今年の世界情勢の見通しは極めて不透明である。

唯一の救いは米国経済が安定しており、我が国もアベノミクスの更なる加速化の必要性その他、様々な課題はあるものの米国に次いで経済はしっかりしており、企業収益をどのようにして国民生活向上のために還元させるかがまさに問われている。

ところで昨年の出来事で驚いたことは、フォルクスワーゲン（VW）による排ガスデータ偽装と東芝による粉飾決算であった。いずれもドイツと日本を代表するメーカーの不祥事であり、かつ歴代経営トップ自らが関与した問題であることに驚かされた。VWは米国への輸出ジーゼル車での偽装が発覚した訳だが、経営陣は発覚の場合、国際問題に発展すると自覚がなかったのだろうか？否、そもそも「バレル恐れ」を感じなかったのだろうか？

一方で東芝の歴代経営陣も、あの粉飾決算が発覚しないとでも思っていたのだろうか？無理をした利益先取りなど、どこかで必ず発覚すること必至であり、心臓の小さい人間はそれを考えたなら夜も眠れないと思うのだが・・・さすがに大物揃いの会社だったのだろう。聞くところによれば、歴代社長は経団連会長を目指し、そのためには目先の利益を嵩上げせざるを得なかったとの極めて個人的な事情があったそうである。そんな些細な動機から伝統ある会社の信用を失墜させ、株主には大損害を与え、社員をリストラの危機に陥れ、そして朝日新聞と同様に、日本人の国際的信用度を落とした罪は極めて重い。その意味で彼ら歴代経営陣は「万死に値する」。（晩節を汚した典型例であろう）

閑話休題。

昨年新たに二人の日本人ノーベル賞受賞者が誕生した。一人はニュートリノ研究の梶田博士、もう一人は熱帯地方の感染症予防薬を開発した大村博士で、特に大村氏の異色ぶり、多才ぶりには驚かされた。彼は絵画への造詣も深く、女子美術大学の理事長も経験して、「日本のレオナルド・ダウインチ」とも呼ばれているそうである。そもそも今回の発見の発端は、静岡のゴルフ場で偶然みつけた細菌が、熱帯地方の感染症に有効なことを見出したことにあり、結果として約2億人を恐ろしい病魔（失明）から救ったとのことで、何事にも一生懸命取り組むと、時々神様からご褒美が与えられるという典型事例である。

加えて、米国製薬会社からの巨額の特許料を、一時経営難に陥った北里研究所の再建に充て見事に復活させたそうである。他者への貢献を生きがいとする「日本人の鏡」のような生き方であり、次代を担う日本の若者たちにも大きな勇気を与えていただいたと思う。翻って、晩節を汚した東芝の旧経営者たちも、元々は「青雲の志」を持っていたらうに、どこでその人生哲学を間違えてしまったのか、一度是非聞いてみたいものである。

以上